

平成 21 年度 FD・SD 宿泊セミナーに参加して

大学教育センター准教授
越朋彦

5月28日から29日にかけて、「首都大学東京の第2段階 FD・SD を目指して」という統一テーマのもと、教職員合同の宿泊研修が開催された。

初日のお昼過ぎ、会場となった八王子の大学セミナーハウスへ向かった。十分な余裕を持って到着したつもりだったが、会場は既に大部分が埋まっており、早くも参加者の活気と緊張感がみなぎっていた。

まず最初に、東京大学名誉教授の天野郁夫先生が「公立大学が目指すもの」についてご講演下さった。「私にとっての」（つまり参加者全員ひとりひとりにとっての）首都大学東京という切実なテーマから始まり、公立大学の特質と歴史、社会における役割が、アメリカの州立大学との比較を交えながら語られた。斯界の第一人者である天野先生のお話は論旨明快にして、目を開かれる瞬間の連続であった。首都大学東京が自らの立ち位置を社会・地域に対し明確に示しつつ、新しい大学へと生まれ変わっていくためには何が必要であるのか——これは、今後の私自身が真剣に考え、取り組んでいかねばならない問題として受け止めた。

次に、大橋隆哉先生のご講演「首都大学東京の課題」と、保阪靖人先生のご講演「全学共通科目のねらい」が続けて行われた。これらは、首都大学東京における教育カリキュラムの目標と全体像を把握する上で、本学へ来て日が浅い私にとって極めて有益な内容を含むものであった。また、今後の課題（とりわけ、成績評価、時間割編成、教室・講堂の収容能力にまつわる諸問題）についても言及があり、フロアからの積極的なコメントを交えて有意義な議論が行われた。

そしてこの日最後の講演は、岡昌之先生による「今日の学生気質——学生対応をめぐる」であった。岡先生は、現代の若者の「複雑系」とも言うべき精神構造（「ひきこもり」傾向、「切れやすい」傾向、「細やか」な傾向）について、洒落なユーモアを交えながらお話下さったが、ご自身の現場でのご経験に裏打ちされたお言葉には、聴衆の共感を引き出さずにはおかない豊かな説得力が込められ

ていた。日々学生と接する立場にある教職員にとって、彼らとの間により良いコミュニケーションを確立するために、明日からでも活用できるヒントが随所にちりばめられていたように思う。

初日の全日程終了後には、夕食・懇親会が開かれ、和やかな雰囲気の中、この日のセミナーに参加した教員と職員が集まり一同に会食した。同じ大学という場所に身を置く両者の連帯感が確かに深まったように感じられ、有意義で楽しいひと時であった。

セミナー二日目は、原島文雄学長のご講演「教職員協働による大学づくり」で幕を開けた。これは、学長の大学人としての「自伝」として大変興味深く拝聴した。原島学長は、ご自身の業績をパワーポイントでたどりながら、技術で実現可能なことでもそれを実際に行うかどうかは、最終的に倫理観の問題であるということを示された。そして、そのことを教えるのが教育の役割であるというご指摘には、文系と理系の学問双方の根底に横たわる切実な問題性を感じ取ることができた。

続いて、串本剛先生のご講演「首都大学東京／765～教育改革を中心に」は、配布資料の最後に付された質問表を埋めるかたちで行われた。首都大学東京のシステム全般に関する基本的なこと、現在の大学教育に関する概説的なことを、Q&A方式による工夫に富んだお話を通じ、明快に理解することができた。初日の天野先生のご講演ともリンクする内容でとてもためになった。

最後に、青塚正志先生の司会で、FDワークショップ「大学教員として備えておくべき資質：シラバスから成績評価まで」が開かれた。「シラバスの目的と意義は？」「受講生は授業においてどのようなことに不満を抱くのか？」「成績評価の目的は何か？」といった問いに関し、終始真剣で活発な議論が交わされた。教員として伝えるべきことと、学生が満足することのできる授業進行を両立させるためにはどうすればよいのか——このワークショップでは、自らの考える授業のあり方を問い直し、より質の高い教育

を提供するための課題について改めて考えることができた。

このようにして今回のセミナーに参加できたことは、4月から新たに本学へ赴任したばかりの私にとって、首都大学東京の課題や大学教育のあり方、今日の学生実態等に関して理解を深め、意識を高めるためのまたとない貴重な経験となった。ここで得たことを生かし、今後首都大学東京の一員としてできる限りの貢献をしていきたいと思う。